

中国地方山間盆地牛市の研究（その3）

岡山県久世牛市の場合

石田 寛
佐藤 雄一郎

4 月市と和牛の流通

春秋二季市は新しい久世牛市創設と同時に月市に変わった。3日・4日、14日・15日、24日・25日という風に3の日と4の日に市が開かれる様になったのである。記述の如く明治時代には中国山地は純然たる仔牛生産地帯というよりも牡仔牛育成地帯的性格を兼ねていたが、大正年代にはいり粗放的放牧慣行がすたれ、仔牛生産地帯としての性格を濃厚にしてゆくのである。このことは久世市場で取り引きされる牛の質的・量的変化にヴィヴィットにあらわれている。すなわち市場では、(イ) 成牝牛の入場頭数の減少（第4表）及び取引価格の低下、(ロ) 牝牛及び仔牛の頭数の増加（第4表）及び価格の上昇（10表）、(ハ) 入場頭数取引価格の減少（第7表）、以上3つの傾向が次第に顕著になり、年間総入場頭数に占める久世の表看板たる秋市のウェートが低下し、秋市の特色は次第に薄らいでいった。さらに入場頭数の減少の結果開市期間も縮少した（第9表）。日本全体として昭和7年（1932年）を境として和牛飼育が急に伸びた。全国的にみると今まで優勢であった馬の数が減少し、牛が馬を凌駕したのは昭和7年であった。馬地帯が馬を牛に乗り換えるため和牛市場が拡大し、中国山地は和牛生産地として特色を濃くしたのである。久世市場の直接後背地たる真庭郡についてみると、牡牛から牝牛への移行は大正9～10年（1919～1920）にかけてすすみ、そのち停滞し昭和7年（1932）より牝の飼養頭数が急増し（第6表）、牡牛頭の減少をみたのである。このような全国的趨勢が久世牛市の取り引きにあらわれたものといえよう。昭和4年開通した姫新線に支えられて、久世市場の商圏は中部地方（静岡・福井）まで伸びた。久世市場で成牛より仔牛の方が多く取り引きされ、成牝牛より成牝牛の方が高値で売買された。昭和8年（1933）はこのような意味において久世市場にとって一つのエポックを画する年といえよう。すな

わち商圏拡大第1期である。しかしその商圏も中部地方どまりであった。久世市場から移出される仔牛と成牛の比率をみると仔牛の比率も上昇一路をたどってはいない。このことは日本全体の馬から牛への切り換えのスピードと関係があるようである。

商圏拡大第2期は、戦後ことに昭和25年以後の進出である（第10表）。これはいうまでもなく日本における馬を牛に乗り換える最終期の牛需要に応ずるものであり、昭和27年の有畜農家創設事業法はこれに拍車をかけ、停滞状態にあった久世市場に活気を与えた。今日の県外市場をみると次の如くなる。(イ) 近畿、県外移出の過半数を占め肥育の素牛として送られる。明治以降の粕喰牛の伝統をつぐものである。(ロ) 北陸、福井・新潟など雪国へ牽引牛として送られる。つまりかつての車牛的性格をもつものである。(ハ) 関東、埼玉・栃木・群馬へ弱令肥育牛として送られる。(ニ) 東北、目下馬を牛に乗り換えつつある地域で、繁殖基礎牛を求めている。この需要に応ずべく久世市場から福島・宮城県などへ繁殖基礎牛を送っている（第11表）。岡山県が全体として馬地帯へ牛を供給している姿は第12表の如くであり、久世はその有力な供給市場といえよう。

明治39年以後の売買頭数の推移をみると衰退の一路をたどり、高粱市場はいうまでもなく、山陽線沿いの新興の倉敷・岡山・瀬戸・和気の牛市に及ばない。久世市はしばしば述べた如く秋市のウェートが減少したとはいえ、岡山県の他の牛市に較べると依然として秋市のウェートの高い牛である（第7図）。戦後における開市日数および1頭当り取引平均価格をあげると第13表の通りで価格変動がいちじるしい。昭和32年における秋市で取り引きされた牛の移出先は県内が圧倒的比率を占め、県外移出では兵庫・大阪が多く、昔日の伝統がわずかに残っている。

岡山畜産便り1959.08

第7表 久世市場における年間入場頭数と秋市入場頭数

年次	年間入場頭数	年間売買頭数	秋市入場頭数	秋市売買頭数	年次	年間入場頭数	年間売買頭数	秋市入場頭数	秋市売買頭数
明治39		5,007			昭和17	3,271	2,163	2,742	1,921
40		4,854			18			2,083	1,850
41		4,599			19			1,929	1,249
42		4,323			20			1,038	825
43		4,577			21			1,079	743
大正8	3,982	2,675			22			1,157	853
昭和6	3,798	2,881			23			1,170	1,026
7	4,148	3,043			24			1,605	1,059
8	4,441	2,889	3,385	2,286	25			1,401	982
9	3,963	2,679	3,023	2,105	26	2,184	1,519	1,540	1,073
10	4,121	2,952	3,023	2,173	27	2,139	1,407	1,400	1,041
11	4,260	2,859	3,134	2,167	28	2,562	1,828	1,732	1,230
12	4,491	3,017	3,466	2,311	29	3,227	2,211	1,251	960
13	4,196	3,018	3,289	2,359	30	2,752	2,150	1,405	1,065
14			3,172	2,232	31			1,391	1,047
15	3,875	3,201	3,176	2,245	32			1,212	945
16	3,762	2,946	2,403	1,918					

〔備考〕久世家畜市場成績綴

第8表 久世市場取引価格

	成牛牝平均価格	成牛牡平均価格	仔牛牝平均価格	仔牛牡平均価格	全平均
明治39					48.98
40					64.59
41					51.17
42					37.51
43					39.76
昭和4	120.08	124.65	79.91	64.46	112.56
5	114.84	98.13	67.38	45.39	88.58
6	73.60	75.50	55.10	40.00	61.00
7	70.80	71.40	54.00	36.00	58.00
8	110.47	95.40	80.38	51.99	84.64
9	101.05	75.12	78.79	57.12	78.71
10	135.62	101.67	104.97	61.48	92.01
11	118.41	88.66	94.93	44.71	86.68
12	212.75	111.14	76.05	45.94	124.95
13	156.19	176.70	112.87	89.50	133.81
14	192.80	163.60	115.10	94.70	41.50
15	250.41	136.06	236.20	108.43	132.80
16	346.00	303.70	272.00	127.00	262.17
17	431.00	232.00	258.00	112.00	258.45

〔備考〕昭和2年度起久世家畜市場成績綴

第9表 久世牛市の経営組織及び開市の変遷

年次	明治44年		昭和2年		現在(昭33年)	
経営組織	定期家畜市場株式会社		畜産組合久世市		真庭郡畜産農協連久世市	
開市期間及び日数	年計96日間		年計85日間		年計43日間	
秋市	11月20日-12月15日	26	11月20日-12月7日	18	11月24日-12月3日	10
春市	6月1日-6月10日	10	6月3日-6月9日	7	4月21日-4月23日	3
月市	毎月3・4の日	60	毎月2・3の日	60	毎月2の日	30

岡山畜産便り1959.08

5 むすび

関西6大牛市の一つとして八戸の博労問屋によって春秋二季の牛市が開かれ、なかでも26日の長きにわたって開市した秋市が主として畿内向けの大型牡牛（東牛）を取り扱う点に特色を持っていた。春6月上旬の春市・秋11月から12月にかけての秋市はいずれも春山・秋山から放牧牛をおろした時期であり、農山村の生活のリズムをよくマッチしていた。秋市は畿内向けのこつといを主としながらも、西中国向けの西牛とよばれる役牛も若干売買された。久世市場を境にして農業的先進地帯と後進地帯へ送られる牛がふり分けられた。千屋牛市を眼を西中国に向けた牛市とすれば久世市は東をみつめた牛市であった。総合的百貨店的性格を持つ大山牛市を中心として相互に関連を保ちながら特色豊かな牛市が中国山地に散在していたのである。

しかし交通の発達などにより和牛生産地に栄えた牛市に衰微の色がみえ始めた。明治44年（1911年）に家畜市場法施行を転機に伝統的牛市も相対的地位の低下をみざるを得なかった。博労問屋が問屋としての特権を失って単なる宿屋となったことはいうまでも

ない。中国山地一帯の粗放的放牧の衰退とともに牡牛が減少し、仔牛の生産地的性格を濃厚にしてきた。

昭和8年（1933年）に久世市場として画期的現象がみられた。それは成牡牛——生体貫150貫もある——の取引市場としてその名の聞えた久世市場で取り引きされる成牡牛の平均価格より成牝牛の価格が高価となり、成牛より仔牛が多く取り扱われた。これは馬を牛に乗り換えつつあった日本が、徐々に速度を早め昭和7年（1933年）牛が馬を凌駕し、爾来ますますそのピッチをあげるという全国的趨勢が中国の1山間市場に敏感にあらわれたものといえよう。昭和14年（1940年）まで久世市場は隆盛に赴いたがやがて低調となった。

次にみられる転機は、戦後になって馬を牛に乗り換えつつある東北にまで商圏が拡張したことである。しかし商圏こそ拡大したけれども売買頭数は1,000頭程度で岡山県南部の和牛消費地の新興牛市場に及びもつかない。ともあれ久世市場の歩み来った道は中国地方の生活のリズムとよく調和し日本の畜産の推移と微妙に関連してきたといえよう。

（筆者岡山大学教育学部助教授）

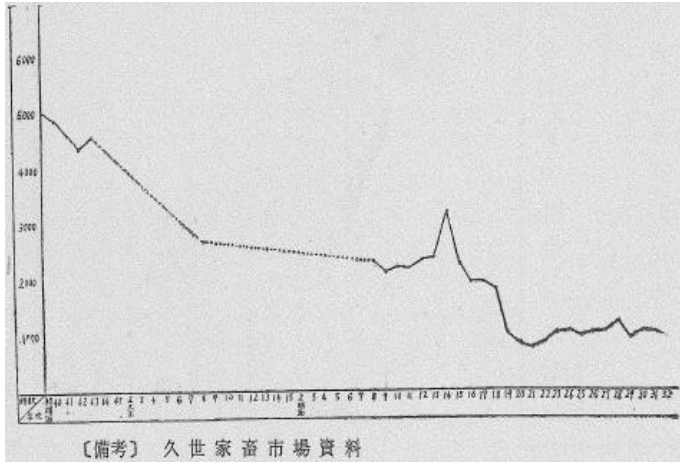
第10表 久世牛市場の県外移出頭数

		昭和20年	昭和25年	昭和27年	昭和28年	昭和29年			昭和20年	昭和25年	昭和27年	昭和28年	昭和29年
東 北 区	北海道	—	—	—	—	—	近 畿 区	滋賀	20	—	7	—	—
	北青森	—	—	—	—	—		京大	—	—	—	—	—
	岩手	—	—	—	—	—		阪	—	8	—	63	70
	宮城	—	—	—	—	30		庫	159	249	80	277	250
	秋田	—	—	—	—	—		奈	—	1	8	—	10
	山形	—	—	—	—	—		和	4	1	—	—	—
	福島	23	—	—	—	—		歌	—	—	—	—	—
関 東 区	茨城	—	—	—	—	—	中 国 区	鳥取	51	9	19	—	—
	栃木	—	17	—	46	52		島	15	—	—	—	—
	群馬	—	54	78	116	60		山	—	—	—	—	—
	埼玉	—	1	23	—	—		岡	—	—	—	—	—
	千葉	—	—	—	—	—		広	5	8	—	—	—
北 陸 区	神奈川	—	—	—	—	—	四 国 区	徳島	—	—	—	33	52
	新潟	—	—	—	—	—		香川	57	—	8	71	82
	富山	—	—	—	—	—		愛媛	—	3	15	—	15
東 山 区	石川	—	—	—	—	—	九 州 区	高知	—	—	—	—	—
	福井	16	12	23	—	30		福	—	—	—	—	—
	山梨	—	—	—	—	—		佐	—	—	—	—	—
	長野	—	—	—	—	—		長	—	—	—	—	—
	岐阜	—	2	—	—	—		熊	—	—	—	—	—
	静岡	11	—	—	—	—		大	—	—	—	—	—
	愛知	—	4	—	—	—		宮	—	—	—	—	—
三重	66	30	10	23	25	分	—	—	—	—	—		
							崎	—	—	—	—	—	
							児	—	—	—	—	—	
							島	—	—	—	—	—	

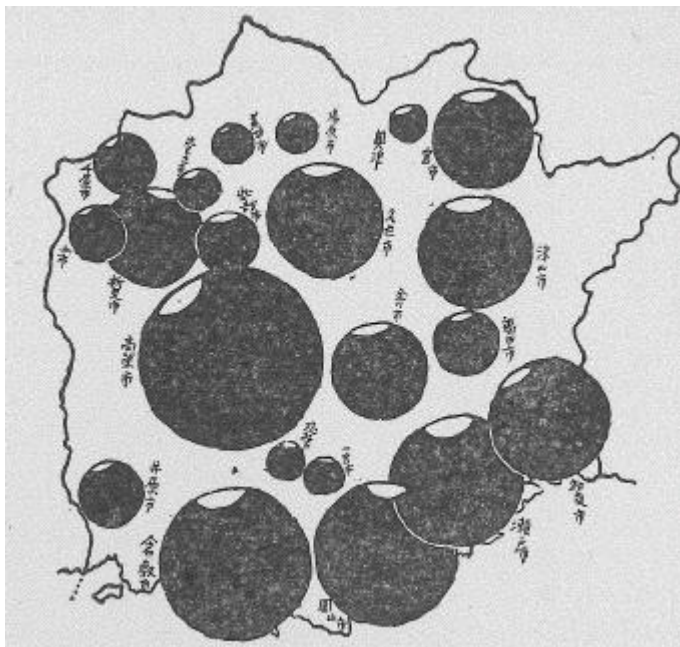
〔備考〕 久世家畜市場取引成績等

岡山畜産便り1959.08

第5図 久世牛市場における売買頭数の推移

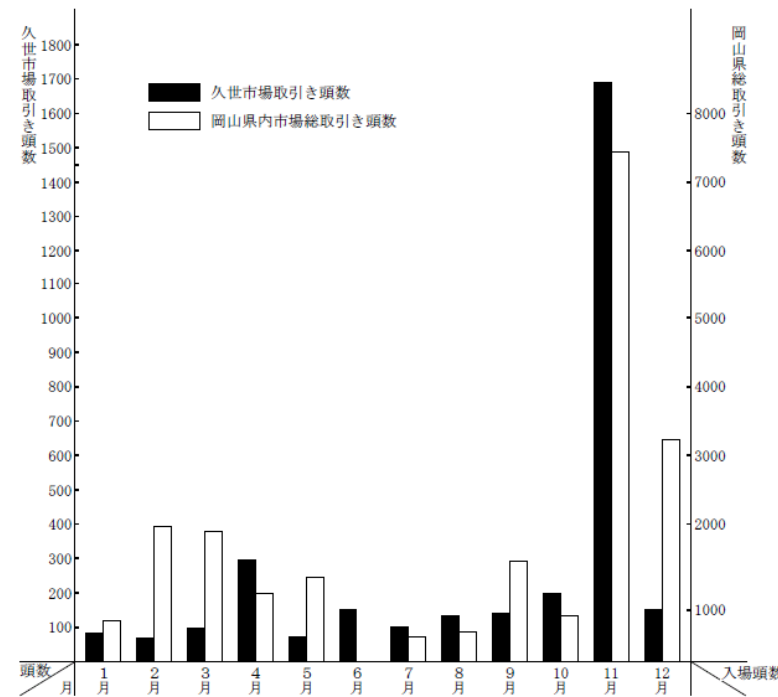


第6図 岡山県下牛市の売買頭数。昭和30年



【備考】岡山県畜産協会連合組合

第7図 久世市場ならびに岡山県全体の月別取引頭数



第11表 有畜農家創設事業法による久世市場の取扱地域別頭数

	昭和27年 11月以降	昭和28年	昭和26年	計
岡山県	10	20	20	50
徳島県	23	50	—	73
宮城県	93	119	218	430
岩手県	130	20	10	160
福井県	—	30	—	30

【備考】真庭畜連有畜農家創設事業法に於ける売買契約書

(表) 第12表 有畜農家創設事業法による岡山県より移出頭数

県別	導出済頭数	県別	導出済頭数
佐賀	84	愛知	84
静岡	318	千葉	282
福岡	105	宮城	161
岩手	272	愛媛	116
栃木	370	群馬	110
福井	298	香川	191
福島	264	広島	20
長崎	10	山梨	27
奈良	53	計	3,067
山形	210	県内	1,256

【備考】県畜連資料